

飼料用米の収益向上のための栽培体系の確立

対象者 飼料用米生産者群

【普及活動のねらい】

甲賀地域では、水稻の生産調整の主力として麦・大豆栽培を推進し需要に応じた米の生産を図っています。しかし、中山間地域に広がる湿田ほ場では、麦・大豆の生産性が低いことから「飼料用米」の作付けを推進しており、令和元年度は約 90ha 作付けされています。

これまで管内の「飼料用米」の栽培は、極度な移植の遅れや過度な疎植、施肥量の不足などが原因で決して地域の標準的な収量を満たせておらず、収量の向上に向けた取組が求められていました。

【普及活動の内容】

平成 30 年度に、区分管理を行う農家を対象にこれまでの品種と比べ収量性が高い多収専用品種である「吟おうみ」が新たに導入されました。

この品種転換と併せて、平成 30 年から令和元年にかけて、栽培研修会や移植時期の早期化、栽植密度の向上、施肥改善などを JA こうかと連携して支援しました。

また、モデル生産者を設け、生育調査ほを設置し、調査結果をもとに施肥や雑草対策など収量向上に向け支援するとともに、個々の生産者には、育苗、移植作業、施肥（穂肥・実肥）および刈取時期に関して巡回指導および広報紙の配布などを行い、意識啓発を含めて改善指導を行いました。



研修会の開催

【普及活動の成果】

2 か年にわたって働きかけた結果、ほとんどの農家で、5 月末までに坪当たり 50 株以上で移植されるようになり、生育に応じた穂肥や実肥の施用など収量の向上に向けた栽培が実践されるようになりました。

しかしながら、今年度は 7 月以降の低温や日照不足、出穂以降の度重なる台風などの影響により作柄が不良となり、標準的な収量を確保する生産者は 3 割に留まりました。

甲賀地域に多い中山間地域では、特に条件不利の農地においては荒廃する水田が増加する傾向であることから、今後ともその抑制のためにも「飼料用米」の収量の向上を図りつつ、取組を推進します。



現地農談会での指導風景